なぜ英語が話せないの

<9>

三井郡内の主婦(四〇)は今、英語の家庭教師探しに奔走している。高二の息子A君が、英語の成績が悪く、このままでは一流大学への進学がおぼつかなくなってきたからだ。A君は数学、国語は学年でもトップクラス。ただ英語だけは五十点前後と芳しくない。「そのうち何とかなる」と思っていたのに、二学期に入っても成績は伸びない。焦りが高じて「家庭教師をぜひ」と泣きついた。

母親は、家婦教師に条件をつけた。「英会話を教える先生はダメ。受験英語と違うんだから」と。A君も「今は入試のコツを教えてくれる人」を望んでいる。

当面は受験に照準

役に立たない入試英語

A君も母親も英会話をやった方が将来、社会に出て役立つことは十分知っている。が、当面は受験英語に照準を当てねばならない。「英語の勉強は、どこかが狂っている」と母親は嘆く。

久留米市・諏訪中学。英語の授業が昨年度から週三時間に減ったあおりで、会話を教える余裕は皆無に近い。生徒の方も週一時間減の授業分を補うため、塾通い組が多くなった。

「わが校の場合、英語塾へ通う生徒は三年生で六二%。うち、六割強は週に三回も塾で英語を学ぶ。週に四時間の英語授業があった一昨年度までに比べ、塾への依存度が増えている」と英語教師たちは説明する。

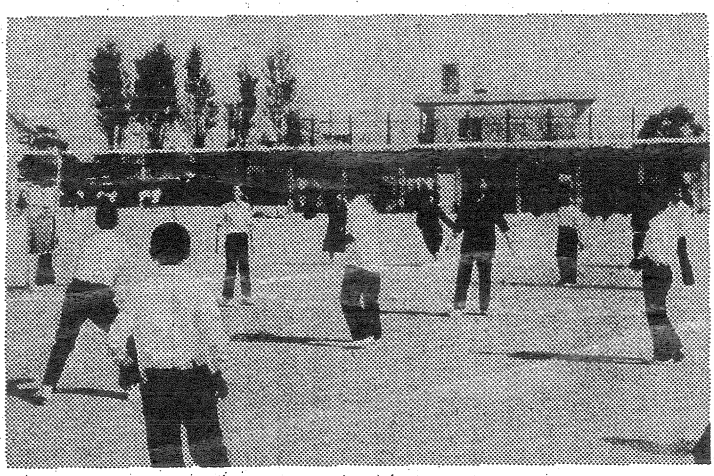
受験英語の弊害は深刻である。その構造は「高校入試」―「大学入試」―「就職試験」と続き、しかも英語のウエートは上学年ほど増大する。芝道雄先生などは「英語を入試から除外すれば、日本人の英語力は飛躍的に向上するかもしれない」とさえ言う。

佐賀、長崎、大分県のように公立高校入試にヒアリングを導入した県もあるが、福岡県は相変わらずの後進県。事態の打開は、各先生の工夫、努力に大きくゆだねられた格好だ。

芝先生は「限られた時間の中で、せめて簡単な会話、さっと口に出てくる英語だけは学ばせたい」と言う。英語が苦手な生徒でも、文法抜きのビートルズの歌やロックンロールは驚くほどうまい。教科書のたどたどしい読み方とは別人のように、発音もきれいだ。

「日常のあいさつの基本文、目的地へ行く道の尋ね方、時間、曜日の表現などは暗記すべき事項。カセットによるヒアリングなども駆使して、生徒たちが英語を嫌いにならないような配慮が大切である」

芝先生には苦い思い出がある。英語が得意だったかつての教え子の一人が、大学(英文科)を卒業後、米国に留学したが、大学での授業内容がさっぱり理解できない。教授は「まず、英語力をつけるのが先」と半年間、外人向けの会話教室入りを勧めた。「受験英語はやっぱり通用しないんでしょうね」と、芝先生は力なく語った。



生きた英語より入試英語に追われる中学生たち